

論 文

栃木県河内郡南河内町の旧家に収蔵されていた
古書写経大方広仏花嚴経と大般若波羅蜜多経について
—— 2 古書写経についての報告 ——

日向野 徳 久

A study of “Daihōkōbutsukegon-kyō-Sutra” and “Daihannyaharamitta-kyō-Sutra”, an ancient family the Hayashis in Minamikawachi-town Kawachi-district Tochigi-prefecture has
—— Report on two ancient copied sutras ——

Tokuhisa Higano

The table of contents

1. Introduction
2. A view of “Hōryū-ji Issai-kyō-Sutra” and the ancient copied sutras “Daihōkōbutsukegon-kyō-Sutra”
3. A view of the ancient copied sutra “Daihannyaharamitta-kyō-Sutra”
4. A view of the process of transmitting the ancient copied sutras to the Hayashis in Minamikawachi-town Kawachi-district (Check the connection with Shimotsuke-Yakushi-ji)

Outline

An ancient family the Hayashis in Minamikawachi-town applied for appointment of cultural properties an ancient copied sutra. The present writer

investigated the two ancient copied sutras, and was surprised. One of them “Daihokobutsukegon-kyō-Sutra vol. 1-5” was written in about the 8th century, and the other “Daihannyaharamitta-kyō-Sutra” was written in the 12th century. And besides “Daihōkōbutsukegon-kyō-Sutra” had been affixed the seal “Hōryū-ji Issai-kyō-Sutra”, “Daihannyaharamitta-kyō-Sutra” had been signed with a bonze Soukei and written the name of a chronological era, Eiman the 2nd.

We know that many kinds of important treasures were lost from the famous temple with a long history, Hōryū-ji built in the 7th century. In addition to that, many treasures were lost for a long time.

I am interested in these ancient copied sutras when and how came to be in the Hayashis.

1. はじめに

昨年（平成2年）10月、私はわが眼を疑うばかりの驚きと感激を味わった。栃木県河内郡南河内町教育委員会を経て、真言宗龍興寺より最近発見されたという銅造の誕生釈迦仏立像と、同町の旧家林安雄家収蔵の「大方廣佛花嚴經世主妙嚴品第一之五」と「大般若波羅蜜多經卷第二百廿六」の2つの古書写経について、県文化財指定の申請があり、同町教育委員会に出張してその調査に当たったのである。

銅像の誕生釈迦仏立像（像高7.2cm、総高11.2cm）は火損のため表面の肌も荒れ右手首先と台座を失っているが、天平期のものであり、2つの古書写経は破損のおそれがあり、わずかしか披見することが出来なかったが、大方広仏花嚴經は8世紀のものであり、見た瞬間とっさにあるいは7世紀まで遡るのではないかとさを感じたほどであった。大般若波羅蜜多經は写真によると奥書に永萬二年丙戌（1166）との年紀が記されていた。

天平10年（738）駿河国を通過した下野国造薬師寺の宗蔵は従僧2人、従者9人を従えており（註1）、36日分の食料を支給された。造薬師寺司というの

であるから、宗蔵は薬師寺を造営するために派遣されていた人物か、あるいはたえず、拡張乃至営繕が行われていたかは別問題として、下野国薬師寺が大寺であったことをうかがわせる文書である。

天平勝宝（感宝）元年（749）には興福寺・法隆寺・四天王寺・崇福寺・新薬師寺・元興寺・筑紫の観世音寺と並んで500町歩を限って墾田を許され（註2）、天平宝字5年（761）には東大寺（天平勝宝6年）について筑紫の観世音寺とともに戒壇が設けられ（註3）、僧尼となるには「東海道足柄坂以东・東山道信濃坂以东」の者は下野国薬師寺において受戒しなければならないこととなった（註4）。よって「坂東十国得度者、咸萃之於此（註5）」たのである。

また、墾田の限度500町歩を許された天平勝宝6年（754）11月には、奈良の薬師寺の僧行信が、八幡宮の主神大神朝臣多麻呂らとともに意を同じくして、厭魅したという理由で、下野薬師寺に流され（註6）、宝亀元年（770）には弓削道鏡が流されている。

弓削道鏡は「造下野国薬師寺别当」として遣わされたものではあるが、

宝亀元年八月庚戌、皇太子令旨 如聞 道鏡法師 竊挾梗梗之心、為日久矣、陵土未乾、謀發覺、是則神祇所護、社稷攸祐、今顧先聖厚恩、不得依法入刑、故任造下野国薬師寺别当發遣（註7）

とあり、道鏡は先聖すなわち称徳天皇の恩寵をうけたものとして、法によって罰することも出来ず、やむを得ず造下野国薬師寺别当として配されたものであり、その2年後道鏡が死ぬと

宝亀三年四月丁巳 下野国言 造薬師寺别当道鏡死、（中略） 以先帝所寵、不忍致法、因為造下野国薬師寺别当、遞送之、死以庶人葬之（註8）

と、庶人として葬ったと下野国司は報告しているのである。

龍興寺境内には弓削道鏡の墓と称する古墳（円墳）があり、古くからそのように伝承され、龍興寺にはそれに照応するかのようには、弓削道鏡の文書と称するものも存在するが、道鏡が造下野国薬師寺别当という官職名のもとに下野国薬師寺にあったとしても、流人としての取扱いを受け、庶民と同じよ

うな葬られかたをしたとすれば、薬師寺域内に葬られたとしてもこのような高塚を築かれるという事はあり得ないことである。

同じ薬師寺跡に建立されている安国寺境内には、戒壇跡や金堂跡もあり、栃木県教育委員会が昭和40年9月から同46年11月にわたって発掘調査した結果、下野国薬師寺の四至は東西約252m（2丁20間弱）・南北327m（3丁弱）に及ぶものであることが明らかとなった。

本寺創建時の瓦は軒丸瓦が八葉複弁蓮華文で、外区は面違い鋸齒文、中房の蓮子に円圈がつく白鳳期の特徴をよくみせた灰白色堅緻の瓦であり、これと組む軒平瓦は重孤文であり、この組み合わせは奈良県明日香村川原寺のものと同系であることも明らかとなった（註9）。

このことは、天武天皇創建説は論外としても、持統天皇創建説を補強することになる事実である。

この発掘に南大門跡・中門跡・西回廊跡・講堂跡・戒壇跡・西大門跡・塔跡その他伽藍の配置を明らかにすることができ、瓦のほか丈六の仏像の頭部につけられていた土製螺髪や、塔の屋根の軒先にさげられていたと思われる風鐸などの遺物も出土している。

文献にこそ「続日本紀」「続日本後紀」等の正史のほか、「天平五年右京計帳」「天平十年駿河国計帳」「東大寺要録」「類聚三代格」「延喜式」「伊呂波字類抄」「帝王編年記」「東大寺文書」などに下野国薬師寺の記事があり、下野国府遺跡からも、下野国薬師寺のことを記したかと思われる木簡が出土している（註10）が、残念ながら当時よりの伝世品は残されていなかった。

ところが最近、龍興寺の須弥壇の下から、明暦3年（1657）の銘をもつ銅製の箱に納められている銅製の誕生釈迦仏立像が発見された。実に南河内町大字薬師寺の龍興寺に天平仏があったのである。栃木県立博物館人文課長北口英雄氏によれば、天平の誕生釈迦仏像は、茨城県立歴史館に1体、栃木県下都賀郡藤岡町に1体、そして本品と、北関東には3体あるのみである。

龍興寺は、もと薬師寺の地藏院であったと称し、天和元年（1681）から享保4年（1719）にかけて安国寺（後述）と薬師寺の正統を争う戒壇帰属についての争論を繰返している。天保9年（1838）安国寺は戒壇を、龍興寺は鑑

真墓所を守護するというで和解（註11）が成立した。龍興寺の主張通り薬師寺の地藏院の由緒をひくものとすれば、この天平仏は薬師寺以来の伝世品である可能性がきわめて高いということになる。

そしていま目の前に8世紀のものと思われる大方広仏花嚴経と永万2年（1166）と年紀を記した大般若波羅蜜多経が存在する。しばらくは夢見る心地であった。とくにこの2つの古書写経については〈あるはずがない〉と何回わが心のうちに現実を否定したことであろう。次にこの二古書写経についてその所見をのべることとする。

2. 大方廣佛花嚴経卷一世主妙嚴品についての所見

「花嚴経」は「華嚴経」とも書く。この古書写経は「花」字を用いているが、むしろ「華」字を用いる方が一般的である。もちろん意味は同じである。なお本文中においては「廣佛」は「広仏」というように略字を用いることとする。

「大方広仏花嚴経」とは華嚴経の正しい題名である。クシャーナ王朝初期の100～200年ころ、中央アジアにおいて編纂・集成されたと推定される大乘経典であり、この経典には「六十華嚴」「八十華嚴」「四十華嚴」と「蔵訳華嚴」の4種がある。

六十華嚴は東晋の仏馱跋陀羅（ブツダバトラもしくは覚賢ともいう）の漢訳した「大方広仏花嚴経」で、34品^{ほん}（34章）60巻からなり、「六十華嚴」「晋経」もしくは「旧訳華嚴経」ともいう。揚州道場寺において、義熙14年（418）にはじまり、元熙2年（420）に訳了した。

八十華嚴は唐の実叉難陀^{じつしやなんた}（シクシャーナンダ、もしくは学喜ともいう）が菩提流志・義浄・復礼・法蔵らの助けをかりながら漢訳した「大方広仏華嚴経」で、39品（39章）80巻からなり、「八十華嚴」「唐経」もしくは「新訳華嚴経」という。実叉難陀^{うてん}は于闐（サマルカンド）の人である。はじめ洛陽の大内大遍空寺、のちに仏授記寺にうつって漢訳。澄聖元年（695）にはじまり聖暦2年（699）に訳了した。唐の武周朝（則天武后）の時代のこととて「唐

経」ともいうのである。則天武后はこの訳出を積極的に支援して自ら序文を書いている。

四十華嚴は、唐の般若三蔵（^{ほんにやさんぞう}プラージュニャー）の漢訳した「大方広仏華嚴經」で1品（^{ほん}1章）40巻からなり、「四十華嚴」「貞元經」「普賢行願品」と略称する。長安の崇福寺において貞元11年（795）にはじまって貞元14年（798）に訳了した。チベット語訳すなわち蔵訳華嚴はジナミトラ・スレンドラポーディなどが、9世紀末ごろにチベット語に訳したもので、45品（45章）115巻からなっている。

華嚴經の原経ともいうべきサンスクリット本は現存しない。現在サンスクリット語の完本としてのこっているのは、「六十華嚴」「八十華嚴」「蔵訳華嚴」等三種の華嚴經の「十地品」と「入法界品」にあたる部分のみである。

また、「四十華嚴」はこれら三種の華嚴經（大華嚴という）のうちの「六十華嚴」「八十華嚴」の最後の章の「入法界品」「蔵訳華嚴」の「荃莊嚴品」に対応する独立經典で性質が異なる（註12）。

南河内町の林安雄家より発見された古書写経の1つ 華嚴經は、「大方広仏花嚴經 卷第一の五 世主妙嚴品」である。晋経すなわち「六十華嚴」の卷第一は「世間淨眼品」であり、唐経すなわち「八十華嚴」の卷第一が「世主妙嚴品」なのである（註13）。

「八十華嚴」の成立は前述のように7世紀末のことであるから、わが国に伝来したのは早くても8世紀になってからということになる。

奈良時代には、わが国では 三論・法相・俱舍・成実・律・華嚴の各宗をそのまま受容した。いわゆる南都六宗である。そして現実的な民族性を反映して、一方では般若・法華・維摩・金光明などの諸經典を現世利益に用いている。

八十華嚴は、わが国においては養老6年（722）11月元正天皇が太上天皇（元明天皇）の冥福を祈るために、華嚴經80巻、大集經60巻・涅槃經40巻・大菩薩藏經20巻・觀世音經 200 巻を写すよう詔されたという続日本紀の記事が初見である。玄昉は靈龜2年（716）留学僧として入唐、天平7年（735）経論 500 余巻および諸仏像を与えられて帰朝した。八十華嚴がそのなかに存

在したのはもちろんであり、それより後も再三にわたって写経されている。

(註14)

天平勝宝6年(754)唐の楊州龍興寺の鑑真が来朝したが、その将来した中にも「大方広仏花嚴經八十卷」が存在する(註15)。もちろん当時「六十華嚴」も伝えられている。唐僧道璿は天平8年(736)ごろ華嚴の章疏をもたらし、天平12年(740)新羅僧審祥は良弁の依頼によって「六十華嚴」を金鐘寺(東大寺)において3年がかりで講議した。審祥は唐の法蔵の弟子であり、日本に来朝してから大安寺に住していた。

「六十華嚴」の第2は「廬舎那仏品」であり、「八十華嚴」の第6は「毘廬舎那品」である。天平15年(743)聖武天皇は大仏造立を發願、何回か失敗の末天平勝宝4年(752)開眼供養するにいたったが、大仏こそ「梵網經」を介して具象化された華嚴の仏(「廬舎那仏」「毘廬舎那仏」)なのである。(註16)。

大方広仏花嚴經第1の世主妙嚴品は5節から成り、林安雄家の古書写経はその5節、すなわち「一の五」である。法量は縦25.8cm・横862.2cm料紙は栴交斐紙であり、細い墨界罫線を引いている。罫界高約21.8cm・界幅2.19cm・1行17字。18紙が貼継してあり、「法隆寺一切經」という4.7cm方形の黒印を卷首の下部の紙の継目と卷末の下部に押している。

法 量

紙 数	縦(cm)	横(cm)	行数	紙 数	縦(cm)	横(cm)	行数
第1紙	25.8	49.8	22	第11紙	25.8	52.2	24
2	〃	52.3	24	12	〃	52.5	24
3	〃	52.2	24	13	〃	52.3	24
4	〃	6.5	3	14	〃	54.4	24
5	〃	45.8	21	15	〃	52.3	24
6	〃	52.2	24	16	〃	52.4	24
7	〃	52.2	24	17	〃	51.8	24
8	〃	52.2	24	18	〃	26.7	3
9	〃	52.2	24	計		862.2	385
10	〃	52.2	24				

この古書写経の計測は、聖心女子大学助教授佐藤信、東京大学史料編纂所員高橋ひな子両氏のマイクロフィルム撮影の際の計測によった。次章にのべる大般若波羅蜜多経も同じく両氏の計測によったものである。いま本古書写経を末尾まで披見することは破損するおそれがあり、裏打ちのために披げるときまで不可能である。よってこの古書写経についての見解は、巻首の部分・第2紙あたりまでの披見と、あとはそのマイクロフィルムより現像した写真によらなければならなかった。幸い写真によっても紙の継目を知ることができる。いうまでもなくスケールもともに撮っているから、この計測を参考にしながら写真からもそのスケールを知ることができる。それによって各紙の行数を数えると、この表のような結果となる。

本古書写経は、写経所において写経生の書写したものと思われる。写経文字であり、聖武天皇や光明皇后の文字に見るようなのびやかさはないが、謹厳にして緊張感があり、1字の脱字もない。書風は王羲之の影響を受けた天平時代のものに加えて唐初の書家欧陽詢の影響も感ずる。8世紀も奈良時代とすればその末期、もし平安時代とすればそのごく初期のものではないかと思われる。

「法隆寺一切経」という方形黒印は、鎌倉時代初期のものと思われるが、その流出を防ぐために捺したものであろう。

写経生がそのことに全神経を集中して書写しても、数多くの文字を書写するうちについで脱字なり、誤字なりが生ずるものなのである。第4紙の横の寸法が6.5cm、文字は3行のみというのは、端紙を継ぎ合わせたというよりあるいは脱字なり誤字なりに気づいての修正を物語るものかも知れない。後に述べるが書経所には校生（校生者）もおかれていた。しかし、補書するだけでなく紙を改めたとすれば、それだけ本古書写経には審重さと厳しさがうかがわれるのである。

幸い「法隆寺一切経」の方形黒印を捺した「大方廣佛花嚴経卷四十二」の巻首部19行と巻末部17行の部分の写真版および法隆寺一切経の成立について「奈良六大寺大観第4巻・法隆寺」岩波書店（1791・5・7）刊に詳述され、解説部には、この方形黒印を捺している一切経にかかわる保安3年（11

22) 3月23日の勸進僧林幸の「法隆寺林幸一切經書写勸進状」の全文を掲げている。

同書(74~5頁)の堀池春峰氏によれば、「『大方広仏花嚴經卷四十二』は保安新写のものではなく、天平時代末期の書写で、林幸勸進のみぎり、本巻を入手し、80巻本の中に充当したものと思われる。(中略)書写年代は明らかでないが天平神護2年(766)の吉備朝臣由利願經や神護景雲2年(768)の称徳天皇勅旨一切經にみられる躍動性はなく、むしろ謹厳な書風の中に硬直化が随所に認められる。もちろん写經生の書写であるが称徳天皇の一切經よりやや時代は降るものと考えられる」という。

林安雄家の「大方広仏花嚴經第一の五」は、順序からいえば岩波本に紹介されているものより早いこととなるが、林幸が勸進するにあたって古いものを入手し、充当したとすれば、それをもって古さを推量することはできない。また私は吉備朝臣由利願經を見る機会に恵まれていない。

筆の運びからみて、写經生は別人であるし、写經所も異にしているかも知れず、年代的に軽卒には論じられないが同書所載の「花嚴經第四十二」より若干遡るのではないか、あるいは吉備朝臣由利願經の可能性も否定し得ない。もし百歩譲って年代が降るとしてもそれほどの差はないと思われる。

いずれも写真による比較であり、「一の五」の場合は実物も(巻初の部分ではあるが)見ているというちがいはあるが、岩波本に比してやや肉太であるが、いわゆる「硬直化」は感じられない。

天平19年(747)2月の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」と天平宝字5年(761)10月の「東院資財帳」には一切經の明記はない。

天長5年(828)2月に西大寺に在った吉備朝臣由利私願一切經を当寺に移したという「日本紀略」淳和天皇の条の

天長五年二月庚子 在西大寺四王堂 故正四位下吉備朝臣由利之奉写一切經 宛法隆寺為彼寺經

とあるのが法隆寺一切經についての初見である。しかしこの吉備由利一切經は、以後どうなったか。当寺には伝存しないと岩波本に堀池春峰氏はのべておられる。法隆寺には「大宝積經」が19巻ほど現存し、その「卷第七十四」

の奥書に「承德三季己卯八月之比 奉書写了 法隆寺結縁一切經之内七十三・四并二卷 僧頼圓 敬奉書写之」とあり、承德3年(1099)に一部の經卷の書写が実施されていたことを示している。

さきにあげた法隆寺勸進僧林幸の「法隆寺林幸一切經書写勸進状」によれば、

奉崇一切經論律等 諸山近日熾盛也 於仏法根本当寺如何 闕斯事。将
今法燈不滅之前 爭再挑光哉云々

と。当時一切經が崇敬され、諸寺において一切經論律等の書写整備が盛んに行われているが、法隆寺ではそのことが欠けていた。翌3年は聖徳太子の500年の遠忌にあたる。そこで林幸はこの勸進を企てたのであるが、すでに去る永久2年(1114)僧勝賢の勸進による一切經の書写が行われ、2700余巻が書写された。これだけではまだ完成とはいえないが元永元年(1114)10月2日小田原上人(堀池春峰氏の岩波本によれば、山城國小田原山寺(浄瑠璃寺))の念仏聖で有名な迎接房經源を招いて書写供養が行われた。ついで保安3年(1122)の林幸の勸進にいたるのである。林幸の勸進は残りの經論4400余巻の書写を目標としたものであった。堀池氏は以上の例を挙げて、法隆寺一切經は第1期 承德期。第2期 永久2年から元永元年まで。第3期 保安3年以降林幸勸進の3期に及んで完成したものであると述べておられる。

写經所は「大宝令」では図書寮に属した。仏典を主に写す写經所の独立年代は不明であるが、日本書紀29 天武天皇二年三月の条に

是月聚書生、始写一切經於川原寺

と記している。これが写經についての初見である。

神亀5年(728)の長屋王願經「大般若波羅蜜多經」の跋によれば、この大般若經は写經所で書写されている。

天平元年(729)から光明皇后の皇后宮職が写經所を經營し、天平15年(743)以後は、たとえば聖武天皇の願經書写や紫紙金泥經の書写など特定の写經を行うための写經所がわかれた。天平20年(748)から天平宝字5年(761)に写經所は造東大寺司に属したが、天平宝字7年(763)から宝龜7年(766)にいたる時代は奉写御執經所と奉写一切經司が中心となり、写經所は造東大

寺司に属さないで内裏に置かれた。またこれら官営写経所のほか、山部皇太子や藤原仲麻呂のような皇族や貴族、薬師寺のような大寺も写経所を設けたが、官営写経所は国家仏教が中心であった時代の所産であり、平安時代には急速に衰えた。(註17)

3. 大般若波羅蜜多經卷二百廿六についての所見

本古書写経は「大般若波羅蜜多經卷第二百廿六」という経題について、次行に「初分難信解品第卅四之世五 三蔵法師玄奘奉 詔譯」とある。

玄奘(602-64)は唐の貞観3年(629)万難を排して北インドに入り、貞観19年(645)長安に帰着、太宗は大いによろこび、勅して訳経のことにあたらせられた。玄奘はその保護を受けて、長安の弘福寺・慈恩寺・玉華宮において大般若波羅蜜多經600巻をはじめ、瑜伽師地論・撰大乘論・唯識論・俱舍論など75部 1335巻を漢訳した。

大般若波羅蜜多經の原題は“Maha- Prajna-Paramita-Sutra”全体は4処6会に分かたれ、80余科の項目をあげて一切空であることを明らかにし、最高智の完成を強調した大乘初期の經典である。1世紀ごろから個々に成立していった各種の般若經典類を表題名にして集大成したもので、漢訳仏典中最大の經典である。

「続日本紀」一 文武天皇4年(700)の条に、4年3月道照和尚が物化し、火葬に付したことを述べ、ついで

初孝徳天皇 白雉4年 隨使入唐 適偶玄奘三蔵 師受業焉(中略)

臨訣三蔵 以所持舍利經論 咸授和尚而曰 人能弘道 今以斯文附屬と。白雉4年(653)に遣唐使に従って入唐し、玄奘にあい、別れに臨んで玄奘の所持している舍利と經論をすべて与えられたと述べている。このとき大般若波羅蜜多經は日本に請来されたと見るべきであろう。

護国除災のため、これを転読または講讀する法会を大般若会もしくは般若会といい、この經典を供養することは無上の功德とされた。

大般若波羅蜜多經の写経ももちろん早い時期から行われていた。奈良薬師

寺の大般若経第二十三に

藤原宮御寓天皇 以慶雲四年六月十五日登遐 三光慘然 四海過密 長屋殿下 地極天倫 情深福報 乃為天皇敬 写大般若経六百卷 用盡酸割之誠焉

和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟

用紙一十七紙 北宮

とある。(註18)

慶雲4年(707)6月15日登遐された天皇といえば文武天皇である。すなわち文武天皇の供養のため長屋王が大般若経600巻を写経されたというのであり、用紙17紙とは、この大般若波羅蜜多経第23巻を书写するに要した紙の枚数のことである。もちろん長屋王の発願によって写経所において写経されたものである。

大般若経(大般若波羅蜜多経)600巻を书写するには10331枚の用紙の準備が必要だった(註19)。

林安雄家収蔵の「大般若波羅蜜多経二百廿六」は、法量縦25.3cm、横924.8cm、楮交斐紙を20紙貼継したものであり、「永萬二年丙戌(法隆)寺 願主相慶大法師」との奥書がある。()の中は虫くいのため読みにくいが「法隆」と思われる。各紙の法量および行数は次の表の通りである。

紙数	縦(cm)	横(cm)	行数	紙数	縦(cm)	横(cm)	行数
第1紙	25.3	46.5	24	第11紙	25.3	51.0	23
2	〃	50.9	25	12	〃	51.0	24
3	〃	23.3	11	13	〃	46.5	23
4	〃	25.9	12	14	〃	51.0	23
5	〃	50.8	24	15	〃	50.9	23
6	〃	51.1	24	16	〃	50.6	23
7	〃	50.9	25	17	〃	50.9	24
8	〃	50.5	23	18	〃	50.9	24
9	〃	51.0	24	19	〃	50.7	25
10	〃	51.0	23	20	〃	19.4	4
				計		924.8	431

全体で横（長さ）計924.8cm・431行。このうち第20紙は巻末とて、横（長さ）19.4cmに4行書かれているのみであるから、第19紙まで905.4cmのなかに427行書かれていることになる。

各行ともきちんと細い墨界罫線を引いている。罫界高19.76cm・界幅は1.8cm・1.9cm・2.0cm・2.2cm その他と一定していない。そのなかに17字ずつきちんと書かれているが、本書写経に行間補書1ヵ所・補字が5ヵ所存在する。

第5紙 15行 上から9字目に「色」字補字。すなわちこの行は「清淨何以故若四无定清淨若四无所畏」と書かれていたものが、「清淨何以故若四无色定清淨若四无所畏」となる。字間は下から四字目から他の文字の間隔に比して空いている。この行のおわりの方の文字数に比して空きすぎていることに気づいたものであろう。

第8紙 21行 上から13字目に「若」字補字。すなわちこの行は「清淨故一切智智清淨何以故八解脱清淨」と書かれていたものが、「清淨故一切智智清淨何以故若八解脱清淨」となる。この行の前、20行の下4文字「所生諸受」の字間が、他の字間に比して空きすぎている。この行は他の行より1字少なく16文字しか書かれていない。末尾の4文字を書こうとして5文字分のスペースがあるのに気づいてあんばいしたのであろうか、実は21行目の初文字「清」までをこの行に入れるべきだったのである。故に21行は17文字書いているところへ、1字補字する結果となった。

第12紙 21行目は1行目そっくり脱けてしまい、行間補書を行っている。すなわち20行の「智智清淨无二无二分无別无断故善現八」の次の行に「切智智清淨何以故若八解脱清淨若八勝」と書いてしまい、後からその間に「解脱清淨故八勝處清淨八勝處清淨故一」を加えたものである。この文字は書風から見て、他の補字をした人物と同一人物ではないと考えられる。もちろん補字も本経を写した人物と違うと思われるから、2人の人物が校正にあたったものかと思われるのである。

第13紙 19行 上から13字目に「故」字補字。すなわちこの行は「智清淨无二无二分无別无断善現八解」と書かれたところへ補字して、「智清淨无二无二分无別无断故善現八解」となる。この行は「断」以下「解」にい

たるまで5文字の間が他の文字の間隔に比して空きすぎている。この行の残りが5文字しかないのに6文字分のスペースがあることに気づいて、字間をあんばいしたものであろう。

第15紙 5行 上から9字目に「若」字補字。すなわちこの行は「切智智清浄何以故八解脱清浄若道相」と書かれていたところへ補字して、「切智智清浄何以故若八解脱清浄若道相」としている。なおここでは「故」「八」の間に脱字を示す「○」が書かれている。この「○」は後に補字をするときに書きこんだものか 書写のときに気づいて「○」を書いたものか明らかではない。補字の「若」字は、他の補字に書風が似ている。この行は末尾の3文字「若道相」の文字間が他に比して空いている。4文字分のスペースに3文字を書いた故であり、写経者はこの時点で脱字があることに気づいたものか。そこで脱字の箇所「○」を付したとも考えられる。

第17紙 22行 第1字に「觸」字補字。すなわちこの行は「處清浄故聲界耳識界及耳觸耳為縁所」と書かれていたところへ補字して、「觸處清浄故聲界耳識界及耳觸耳為縁所」としている。ここでは下から4文字すなわち「耳為縁所」を5文字のところへ書いたもので、それぞれの文字間を空けている。

写経生が心をこめて写しても、疲労して1行脱かしたり、脱字や誤字を書くという誤りをおかすものである。

法隆寺の東院に伝来した大般若経は、岩波書店版「六大寺大観」(前出)における堀池春峰氏の解説によれば、天平時代の書写経・平安時代の書写経・鎌倉時代版経・室町時代版経の4種の混成から成っている。そのうち天平時代書写のものは「上宮王院行信御真筆大般若経」と呼ばれ、中世の寺の大事にあたってしばしば真読された。

「六大寺大観」には、天平時代書写の大般若波羅蜜多経卷第四百九十四の卷末部とその後に記した神護景雲元年(767)9月5日の奥書(跋文)の写真が載っている。

それによると、大法師行信は朝廷・四恩のためと、群品(衆生という意味)を救わんため、「法花一乗之宗。金鼓滅罪之文、般若真空之教。瑜(伽脱字。

「瑜伽」の意) 五分の法」すなわち 法華經・金光明經・大般若經・瑜伽師地論等あわせて2700巻を敬写しようと企てたが、途中行信が没したので、弟子孝仁等がその志をつぎ事業を継承し、神護景雲元年9月5日に完成したとべている。

行信は元興寺の僧、天平時代に大僧都として活躍し、法隆寺・大安寺・元興寺の各伽藍縁起并流記資財帳にも僧綱としてその名が見え、法隆寺東院を創立し、聖徳太子作の「法華義疏」・持物の鉄鉢・錫杖・香炉・厨子等を奉納した人物でもある。

天平時代の書写経は600巻中402巻を存しており、そのうち7巻が行信発願経であるという。

ついで平安時代後期、法隆寺五師大法師相慶がこの東院の大般若波羅蜜多經の破損・逸失をいたみ、同僚の助力を得て補填したものである。

この林安雄家収蔵の大般若経も、その奥書にあるように相慶の発願によって補填された1巻である。

仁平元年(1151)から長寛3年(1165)にかけて、相慶・覚厳らが上宮王院(東院)の古経の軸・表紙・紐等を補修し、逸失したものは大和国内外から求得し、あるいはみずから補字を加えて600巻を整備した。

卷第三百八十二の奥書に

仁平元年六月三日書之。上宮王院古経。軸・表紙等皆悉損失。因茲守^(相)
^(大)慶^(大)法師。軸・表紙・比保皆悉修補。如新経(下略)

と、五師覚厳は記し、

卷第二百一十一の奥書に

永久二年歳次甲午十月十五日当麻寺一日書写経也
^(等か)

(中略) 結縁僧静誉 長覚寺

について、別筆で

長寛三年乙酉法隆寺五師大法師相慶 為法界衆生平等利益。破損朽損之経王等。一部六百。求集加書写加修補耳。大法師相慶

とあり、さらに別筆で

承元四年庚午五月廿日一校了。智昭大法師一部奉施入。

と記している。

長寛3年(1165)は、本古書写経の奥書の年号 永万元年である。6月に改元した。

相慶の名は「上宮聖徳法王帝説」の奥書にも、「伝得僧相慶」とある。(註20)。伝得僧というのであるから、当時相慶が所有していたものであろう。本古書写経には「大法師」とあるが、相慶は法隆寺の「五師」でもあった。大法師位とは伝燈を経ても修行を経ても昇る上位の一階であり、「五師」については「延喜式21玄蕃」に

凡諸大寺別当三綱有闕者、須五師大衆簡定能治廉節之僧 別当三綱共署
申送(下略)

とあり、やはり大寺の上位の僧職であった。

4. 2 古書写経が河内郡南河内町の林家にもたらされていた いきさつについての考察

龍興寺の誕生仏が、明暦年間にどうして箱に収められ須弥壇の下に収蔵され忘れ去られていたのか。それ以前はどうだったのか。疑問と興味は尽きないが、それは別問題として、2古書写経はどうして林家に収蔵されていたのかを考究することとする。

明治の廃仏毀釈とそれにとまなう寺院の衰微が、法隆寺などの経巻、什物の流失の大きな原因だった。たとえば孝謙天皇の発願にかかわる百万塔などもこのとき多数流失した。とされている。

だが、「大方広仏華嚴経」「大般若波羅蜜多経」の項に述べたように、古代以来逸失は続いていたのである。それは絶えず逸失していたというのではなく、そこには何かの原因があるものにせよ、逸失していた。百万塔にみれば、100万基の小塔は、大安寺・元興寺・東大寺・西大寺・薬師寺・興福寺・法隆寺・弘福寺の大和の八大寺と四天王寺・崇福寺の十大寺に施入されたが、現在は法隆寺に存在するのみである。明治41年(1908)の平子鐸嶺の調査によると、法隆寺に小塔4万3930基・陀羅尼1771巻があったが、今日重要文化財

指定のものは小塔102基・陀羅尼100巻に過ぎない（註21）。

「法隆寺一切経」に見られるように、12世紀はじめその逸失をなげいて修復と整備、写経が行われて整備されたし、大般若経に見られるように、12世紀後期五師大法師相慶がその逸失をなげき、覚厳らの同僚の協力を得て大般若経を整備するというようなことがあったが、これらがまた時代を経るにしたがって他に流失しているのである。

私は本稿の「1、はじめに」に述べたように、この古書写経を一見して、日本三戒壇下野国薬師寺との関連を直感した。大方広仏花嚴経は法隆寺より薬師寺にもたらされたものではなかったか。それが薬師寺の廃頽にともなって当時この寺と関係のあった林家の手にでも帰したのかと。しかし残念ながらあたらなかった。この2古書写経とも12世紀にいたって整備されたものであり、それぞれの時点では法隆寺に存在したものであった。

下野国薬師寺は「続日本後紀18」仁明天皇嘉祥元年（848）11月3日の条に

下野国言。薬師寺者天武天皇所建立也。体制巍々 宛如七大寺。資財亦巨多矣。

とあるあたりがもっとも栄えた時期だったものであろう。七大寺に比すほどの伽藍をそなえ、財力もそれにともなって豊かであった。だが、寛治5年（1091）には

（前略）往古国王聖武天皇御願東大寺末寺也。三年ニ一度太政官符罷下天 得度授戒所始行也。仍於今昔 破壊顛倒既以明白也（下略）

と東大寺に注進し（註22）、翌6年には薬師寺住僧慶順が

（前略）往古国王文武天皇御願 東大寺末寺也 而末代之近来破壊顛倒已了。成荒野聚落也。（下略）

とのべ、その副進寺注文状に

破壊顛倒已以甚 口成猪鹿之藪 永絶念誦講読勤、更不至於聖朝御願祈禱 加之佛像成塵土

とのべている。東大寺の末寺とくりかえし述べて援助を請うているあたり、東国の戒壇院として中央の東大寺と並んだはずの誇りは忘れ去ってしまった

か、衰亡の崖に立って背に腹はかえられなかったということか。そのような衰亡の危機に瀕しているところへ将来されるはずはない。

この2種の古書写経は収蔵している林家の御祖先が入手されたものであり、その時代は江戸時代後期になってからのことと思われるのである。

そのころ法隆寺の経文その他相当流失が甚しかったと思われるからである。林家では当時家伝薬の製造・販売をしていたという。名主の家などで戦国時代から伝わっていると称する家伝薬を製造して販売する例は数多くあった。そしてその材料の入手のために大和国地方や京都あるいは長崎などと取引関係を結ぶ場合も多かったのである。

伝統的な家伝薬をつくっていた家は明治期に随分減少したが、それでも昭和17年（1942）に企業整備令が施行されるまで、栃木県下に100余軒存在した（註23）。林家もそのようにして大和国地方と交流し、法隆寺より流失しているこの古書写経を入手する機会に恵まれたものと思われる。

もし下野国薬師寺と関連づけるなら、下野国薬師寺があったということから法隆寺の古書写経に興味をもったか、薬師寺領に住むという自意識が働いたことが入手の動機になったという心理的・精神的な影響があったということであろう。

以上、2古書写経の調査報告書にかえるものである。本稿を出すにあたって引用した諸文献・資料はもちろん、とくに所有者の林安雄氏・法隆寺の古谷正和氏・栃木県立図書館調査相談課長村上健吉氏を煩わすこと多大であった。この3人の協力と御指導がなければこの報告書の作成は不可能だったと思われるほどである。それにしてもさきの「大方広仏花嚴経」に比して、「大般若波羅蜜多経」は何と脱行や脱字が多いことであろう。墨罫線の界幅も不定である。これは官営の写経所がなくなったことと平安時代後期（院政時代）という時代相を映すものであろう。

大方廣佛花嚴經 卷第五
 復次善賢菩薩摩訶薩入不思議解脫門
 便海入如來功德海所謂有解脫門名覺
 一切佛國王調伏眾生究竟出離有解脫
 門名普詣一切如來供具足功德境界有
 解脫門名安立一切善性諸大願海有解
 脫門名普現法界微塵數無量身有解脫
 門廣說遍一切國土不可思議數差別皆
 解脫門名一切後塵中悉現無邊諸菩薩神
 通境界有解脫門名一念中現三世劫一切
 事有解脫門名示現一切菩薩諸根有解
 脫門境界有解脫門名能以神通力現諸
 身處無邊法界有解脫門名顯示一切世

60 70 80 90

大方廣佛花嚴經 Daihokobutsukegon-Kyō-Sutra

大般若波羅蜜多經卷第三百六
 諸佛難值信品第四之五 諸佛難值信品
 善現。元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 布施波羅蜜多清淨故布施波羅蜜多清淨
 故若四元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 若一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 若一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 淨或乃至般若波羅蜜多清淨一切智智

大般若波羅蜜多經卷第三百六
 諸佛難值信品第四之五 諸佛難值信品
 善現。元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 布施波羅蜜多清淨故布施波羅蜜多清淨
 故若四元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 若一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 元色空清淨故布施波羅蜜多清淨
 若一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 一切智智清淨故布施波羅蜜多清淨
 淨或乃至般若波羅蜜多清淨一切智智

50 60 70 80 90

大般若波羅蜜多經 Daihannyaharamitta-Kyō-Sutra (卷首と巻末)

註

1. 「駿河国正税帳」
2. 「続日本紀」17 孝謙天皇の條
3. 「元亨釈書」「伊呂波字類抄」
4. 「延喜式」121 玄蕃寮
5. 「続日本後紀」18 仁明天皇 嘉祥元年
6. 「続日本紀」19 孝謙天皇
7. 「続日本紀」30 称徳天皇
8. 「続日本紀」32 光仁天皇
9. 斎藤忠ほか下野薬師寺跡発掘報告書 栃木県教育委員会 昭和48年
10. 同
11. 「安国寺請書写」同寺文書
12. 木村清孝「仏教經典選5 華嚴経成立と中国への伝訳」昭和61年11月筑摩書房
「仏教大事典」1988 小学館
13. 「大正新修大蔵経」大正14年・大正新修大蔵経刊行会。本稿は栃木県立図書館蔵
第9巻昭和35年再刊・第10巻昭和45年再刊本による。
14. 正倉院文書
15. 唐大和上東征伝
16. 木村清孝「仏教經典選5 華嚴経」昭和61年11月筑摩書房
17. 「仏教辞典」1988年7月 小学館
18. 「古事類苑」明治44年12月神社庁蔵版 昭和57年吉川弘文館再刊。
19. 東大寺正倉院文書44
20. 「新稿群書類従 卷第64」塙保己一 昭和4年4月 内外書籍
21. 「奈良六大寺大観 第4巻 法隆寺」1791・5・7 岩波書店
22. 東大寺文書「下野国薬師寺注進状案」
23. 「関東の民間療法」のうち「栃木県の部」日向野徳久 昭和56年 明玄書房